

都城と瓦

— 古代宮都の調査と瓦 —

1. 恭仁宮の構造—大極殿院の調査を中心として—
奈良 康正 P 1～8
2. 長岡京跡南西部—近年の調査成果から—
長谷川 達 P 9～14
3. 平安宮の饗宴施設—京都市 豊楽院の調査—
西森 正晃 P 15～22

期日：平成20年2月24日（日）

場所：京都市生涯学習総合センター

京都アスニー 第8研修室

京 都 府 教 育 委 員 会

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

恭仁宮の構造—大極殿院の調査を中心として—

京都府教育庁指導部文化財保護課

主任 奈良康正

1. はじめに

京都府には、古代に3つの都が存在しました。およそ1200年前の延暦13(794)年には、京都市の中心部に平安京が造られました。平安京に都が遷る10年前の延暦3(784)年には、向日市・長岡京市・京都市・大山崎町にかけて長岡京が造られました。さらにその45年程前の天平12(740)年に、木津川市に恭仁京が造られました。恭仁京は、3つの中では最も古く、聖武天皇により造られた奈良時代の都です。

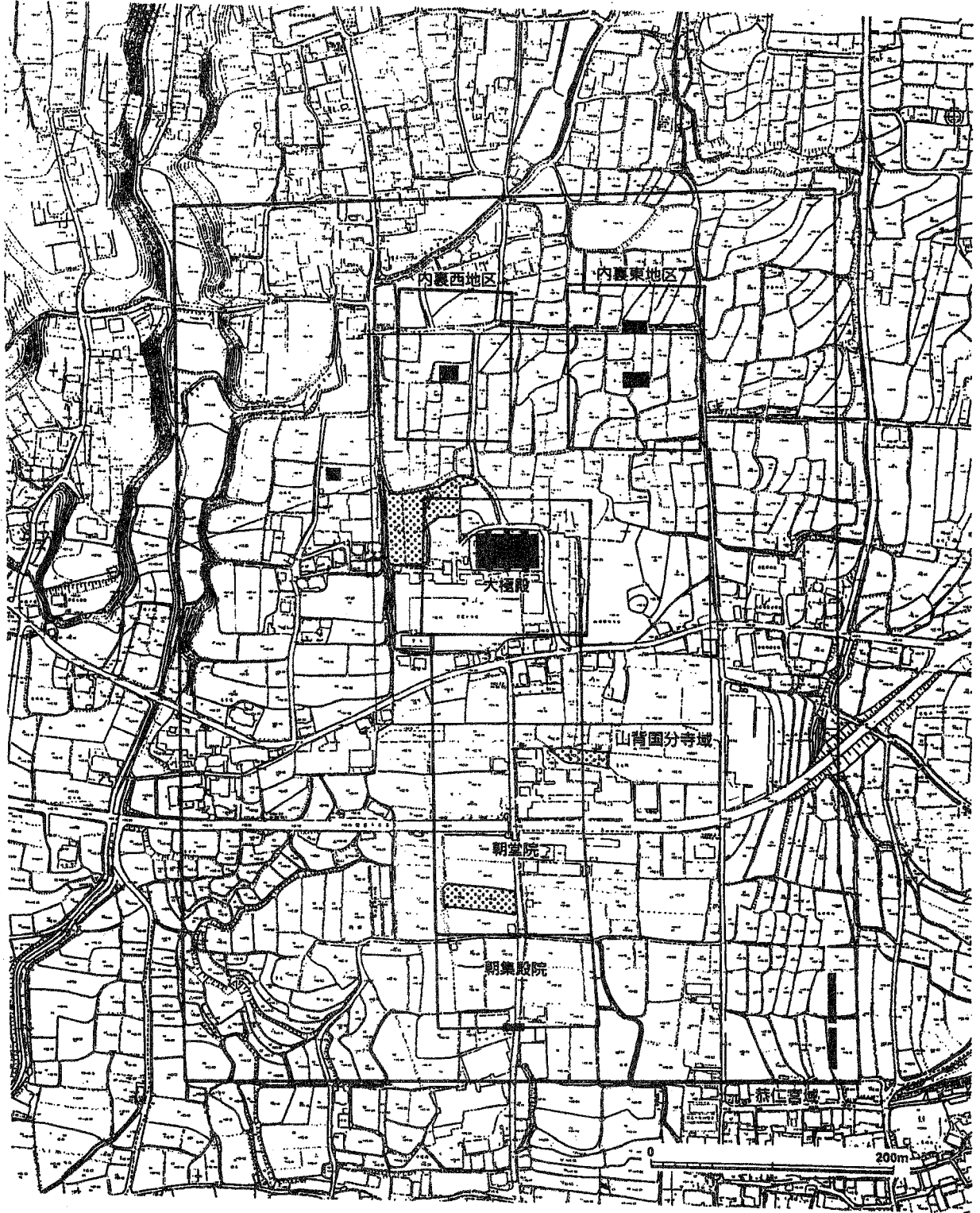
恭仁京の中心、恭仁宮には、天皇が暮らし、様々な儀式などが執り行われた内裏、政務や国家の儀式が行われた大極殿や朝堂院、さらには官人達が仕事を行った役所(官衙)など、現代の皇居や国会議事堂、各省庁に相当する政務を行う上で最も重要な施設が造られていました。しかし、そのわずか5年後の天平16(744)年には、都は大坂の難波宮へと移り、さらにその後再び奈良の平城京へと戻されることとなりました。恭仁宮は国の首都としての役目を終えた後、天平18(746)年にはその中心部が山背国分寺へと造り替えられました。

2. 恭仁宮跡とは？

恭仁宮跡では、昭和48年度から京都府教育委員会が、そして昭和61年度からは旧加茂町教育委員会(平成19年度からは木津川市教育委員会)が一緒に発掘調査を行っています。これまでに分かったことは、以下のとおりです(第1図)。

○大極殿院地区

大極殿は、宮の中心から少し北側に造られており、高さ1mを残す大きな土壇の上に築かれた東西が約45m、南北が約20mもある大きな建物でした。柱を大きな石材(礎石)の上に建てる礎石建物で、土壇に残る西北隅と西南隅の礎石は、当時の



第1図 恭仁宮全体図 (S=1/5,000・アミカケが調査地点)

※■はこれまでに見つかっている主な建物跡

ままの位置にあることが調査により分かっています。また、大極殿の北東では東西約43m、南北約12mもある大きな掘立柱建物がみつかっています。

○内裏地区

大極殿の北側に、東西に2つ並ぶ塀で囲まれた区画が造られました。このような在り方は、他の都では見られない恭仁宮だけのものです。この区画をそれぞれ「内裏西地区」・「内裏東地区」と呼んでいます。「内裏西地区」は周りを全て板塀（掘立柱塀）で囲んでおり、広さは東西が約98m、南北が約128mでした。「内裏東地区」は東・西・南の三方を土塀（築地塀）、北側を板塀（掘立柱塀）で囲んでいました。広さは東西が約109m、南北が約139mで、「内裏西地区」より一回り大きく造られていました。

○朝堂院地区

周りを板塀（掘立柱塀）で囲んでいたことが分かっています。出入り口となる2つの門跡（朝堂院南門と朝集殿院南門）もみつかっています。内側に建てられていた建物跡（朝堂）は、未だみつかっていません。

○宮大垣

宮域は東西に約560m、南北に約750mの大きさを広がり、周りを背の高い土塀（築地塀）で囲んでいたことが分かりました。宮域への出入り口となる門は、いくつか造られていたと考えられますが、これまでの調査では、東南隅付近に造られた東面南門がみつかっています。

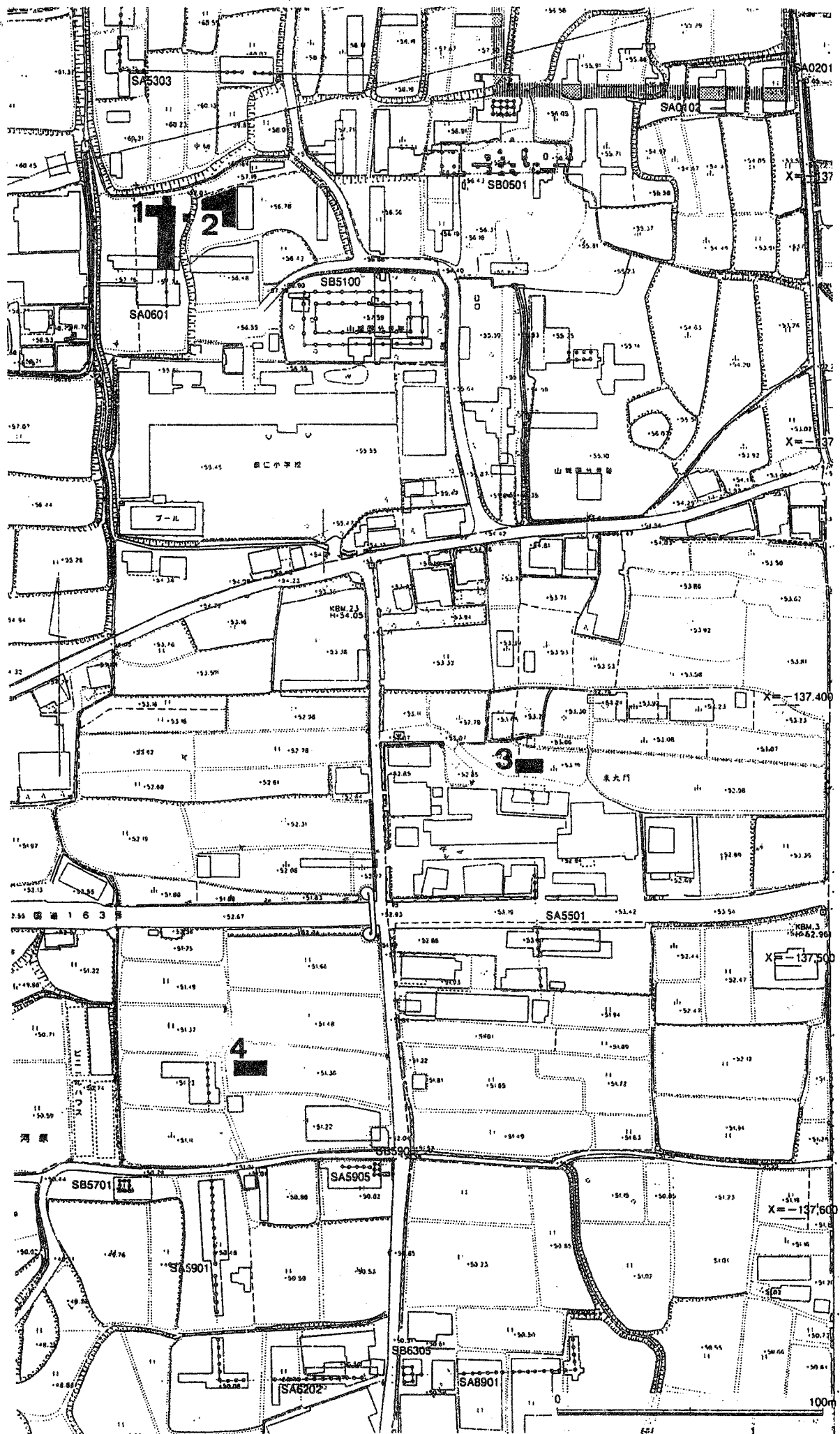
3. 平成19年度の調査で分かったこと

平成19年度は、大極殿院地区で大極殿の周りを囲んでいた施設（大極殿院回廊）を見つけること（第2図1・2）と、朝堂院地区を囲んでいた塀跡（掘立柱塀）と、内側に建てられていた建物跡（朝堂）を見つけること（第2図3・4）を目的に調査を行いました。

ここでは、大きな成果が得られた大極殿院地区の調査について記します。

○大極殿院地区の調査

大極殿院地区の調査は、大極殿の北東地点で実施しました。昨年度の調査で4つの大きな穴が見つかり、大極殿院回廊の屋根を支えた柱の礎石が置かれていた跡（礎石抜き取り痕跡）と考えられたので、これらが北側へ続いていくかどうかを確かめるために調査を行いました。すると、同じように直径1.5m程の穴が6つと、その



第2図 調査地点位置図 (S=1/2,000)

西側に南北方向の溝1本が見つかりました。その並び方から、これらの穴が大極殿院回廊の礎石抜き取り痕跡と、^{あまお}雨^{みぞ}落ち溝であることが分かりました。

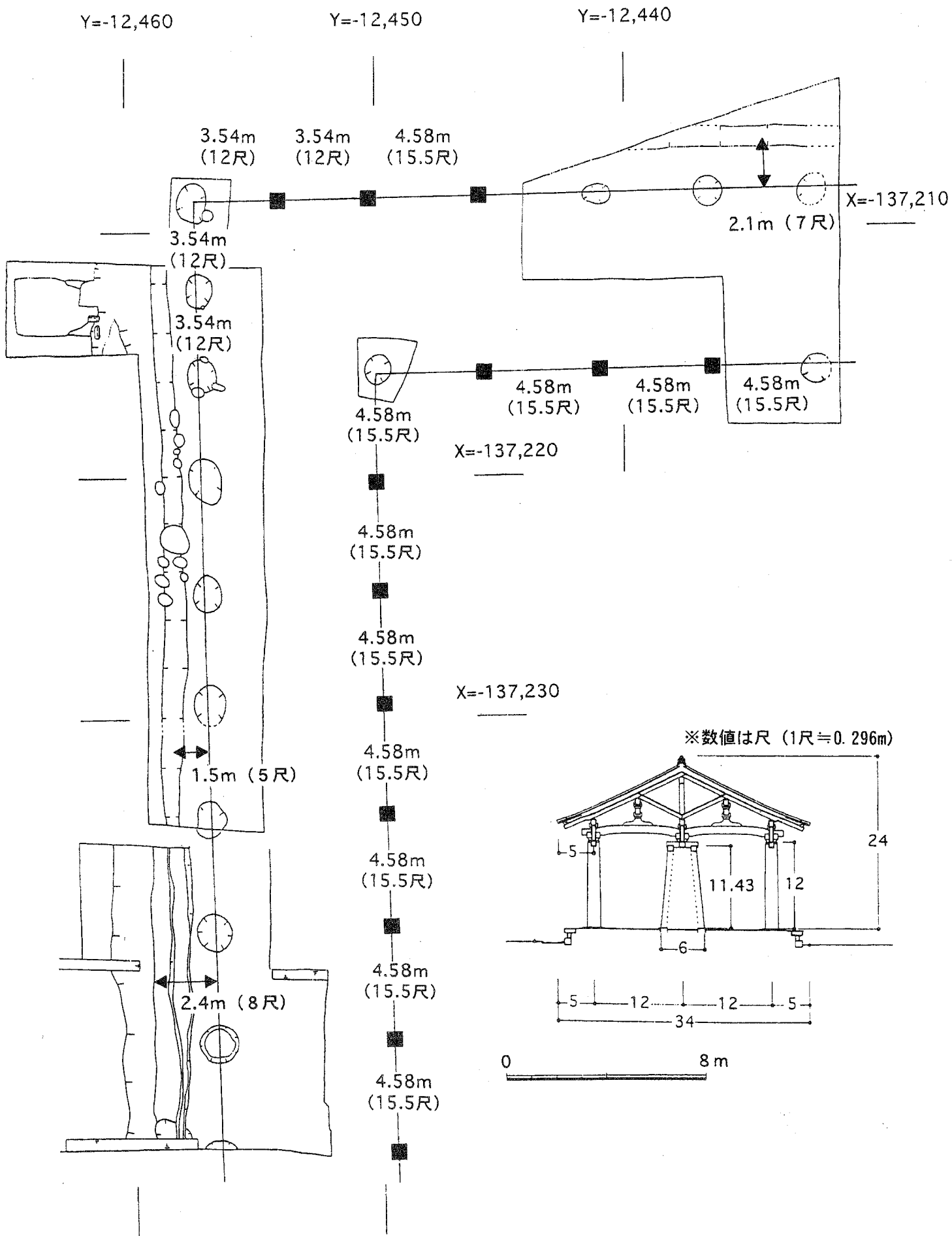
礎石抜き取り痕跡は、南北に約4.6m(15.5尺・1尺 \div 0.296m)間隔で一直線に並んでいました。しかし、北端の3つはその間隔が短くなり、約3.6m(12尺)となっていました。西側で見つかった雨落ち溝と、礎石抜き取り痕跡とは約1.5m(5尺)離れていました。また、北端の3つはその間隔が短くなることから、大極殿院回廊がここで東へと曲がる可能性が高いと考えられたため、東側に第2調査地点を設定し調査を行いました。ここでも、第1調査地点と同様に礎石抜き取り痕跡が4つと東西方向の溝1本が見つかりました。北側で東西に並ぶ3つも約4.6m(15.5尺)間隔で並び、北側で見つかった雨落ち溝までは約2.1m(7尺)離れていました。また、東端で見つかった南北に並ぶ礎石抜き取り痕跡は約7.2m(24尺)離れていました。

4. おわりに

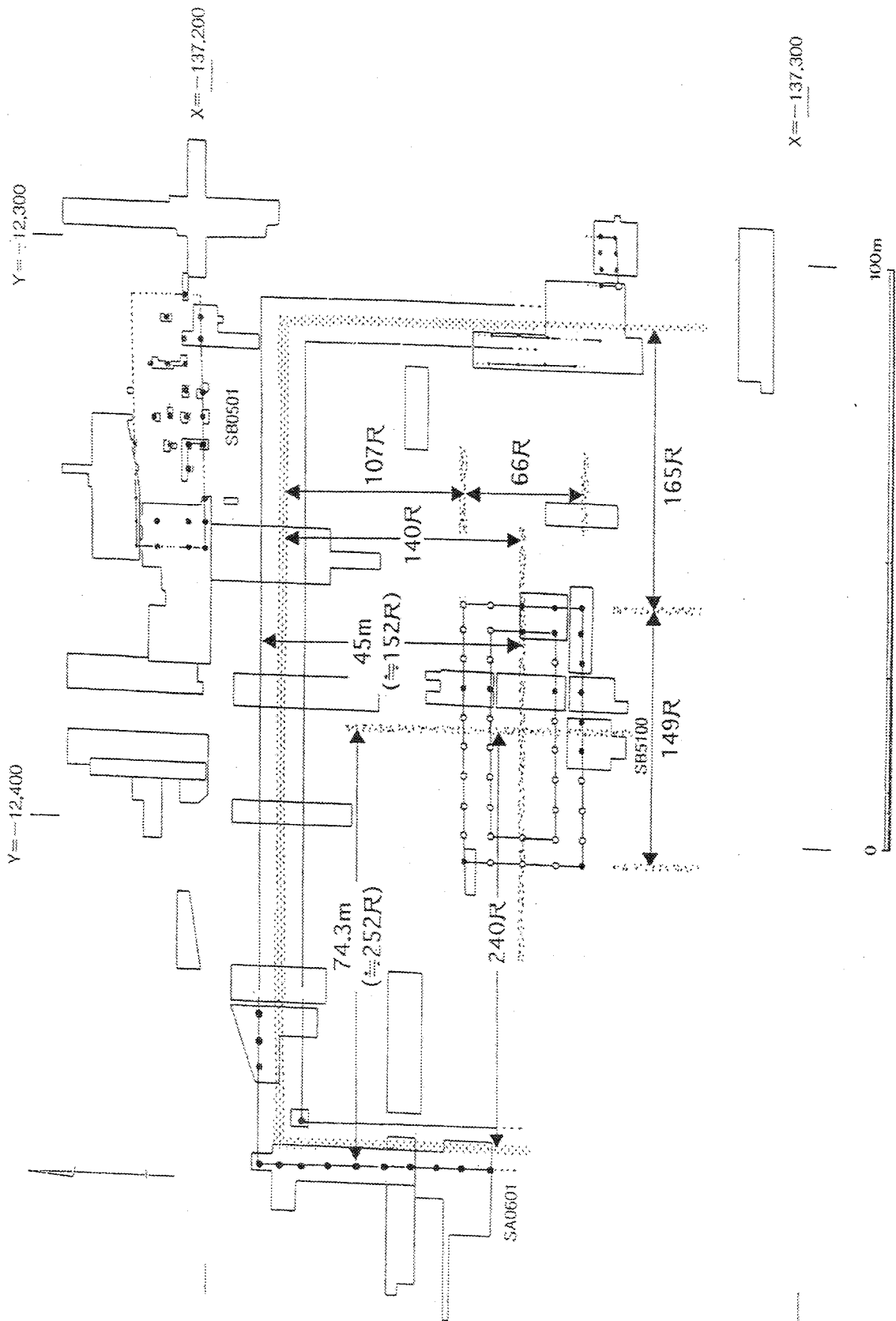
今回の調査では、大極殿院回廊側柱^{がわぼしら}の礎石抜き取り痕跡を11箇所と、外側に廻る雨落ち溝が見つかり、大極殿院の北西隅部が分かりました(第3図)。さらに、今回判明した礎石抜き取り痕跡の配置から、回廊は桁行が15.5尺、梁間が12尺となっていました。中心となる築地塀の痕跡は確認されませんでした。が、^{ふくろうけいしき}複廊形式^{ついで}の築地回廊が造られていたことは間違いないと考えられます。今回の調査で見つかった回廊は、平城宮第1次大極殿院の回廊と同じ造り方をしており、『続日本紀』天平15(743)年12月26日の条に「^{はじ}初めて平城の大極殿^{ならび}并に^{ぶろう}歩廊を壊ちて、遷し造ること四年にして、^{ここ}茲にその功^{わず}纔かに^お畢ふ(以下略)」と記載されているとおりに、平城宮から大極殿と共に回廊を恭仁宮に移築したことが確かめられました。

今回の調査成果により、大極殿院の東西幅は480尺(約142m)で設計されたことが分かりました。また、大極殿の北側には107尺(約28m)の空閑地が広がっていたことも分かりました(第4図)。

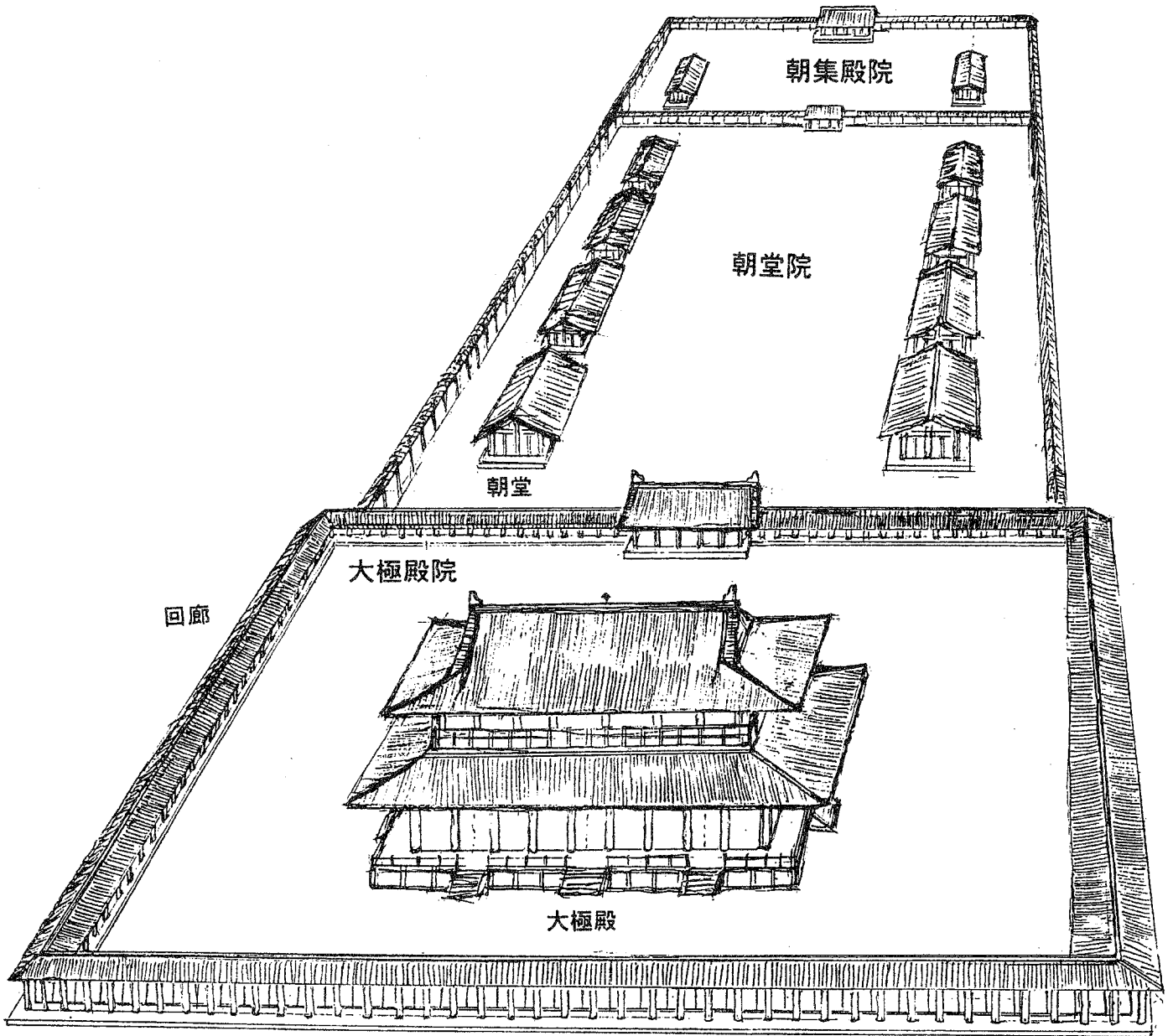
今後の大極殿院地区の調査は、未だ見つからない築地塀や、南側を区画する回廊、後殿などの確認を行い、大極殿院の規模や構造を確定することとなります。



第3図 第1・2調査地点で見つかったもの (S=1/200)



第4図 大極殿院地区の復元図 (S=1/1,000)



第5図 恭仁宮跡中枢部推定復元図（北側から望む）

長岡京跡南西部－近年の調査成果から－

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

課長 長谷川達

1. はじめに

長岡京の調査が開始されてから、50年以上が経過しました。調査件数を宮域、左京城、右京城に分けて整理していますが、合計すると1,920件に達しています。

かつて幻の都とも言われた長岡京も、多くのことが具体的に分かってきましたが、反面、新たな疑問も生じています。

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、近年、長岡京跡の中でも南西部の小泉川流域に調査が集中しています。ここでは、その中から長岡京跡右京第910次調査(友岡遺跡)を紹介します。

2. 長岡京跡右京第910次・友岡遺跡の調査

調査地点は、長岡京市友岡と下海印寺の境の小泉川を見おろす台地の上にあります。長岡京右京八条三坊九町にあるとともに、以前の調査によって縄文時代以降、各時代の集落などが営まれた遺跡であることが分かっていました。

主な調査成果は次のとおりです。

- ・方位を揃えた掘立柱建物跡

S B 40…東西の柱間4.5m。S B 120…総柱建物か。S B 130…南北に長大な建物。

- ・南北軸が西に振れる建物
- ・縄文時代の遺物…石冠、有舌尖頭器

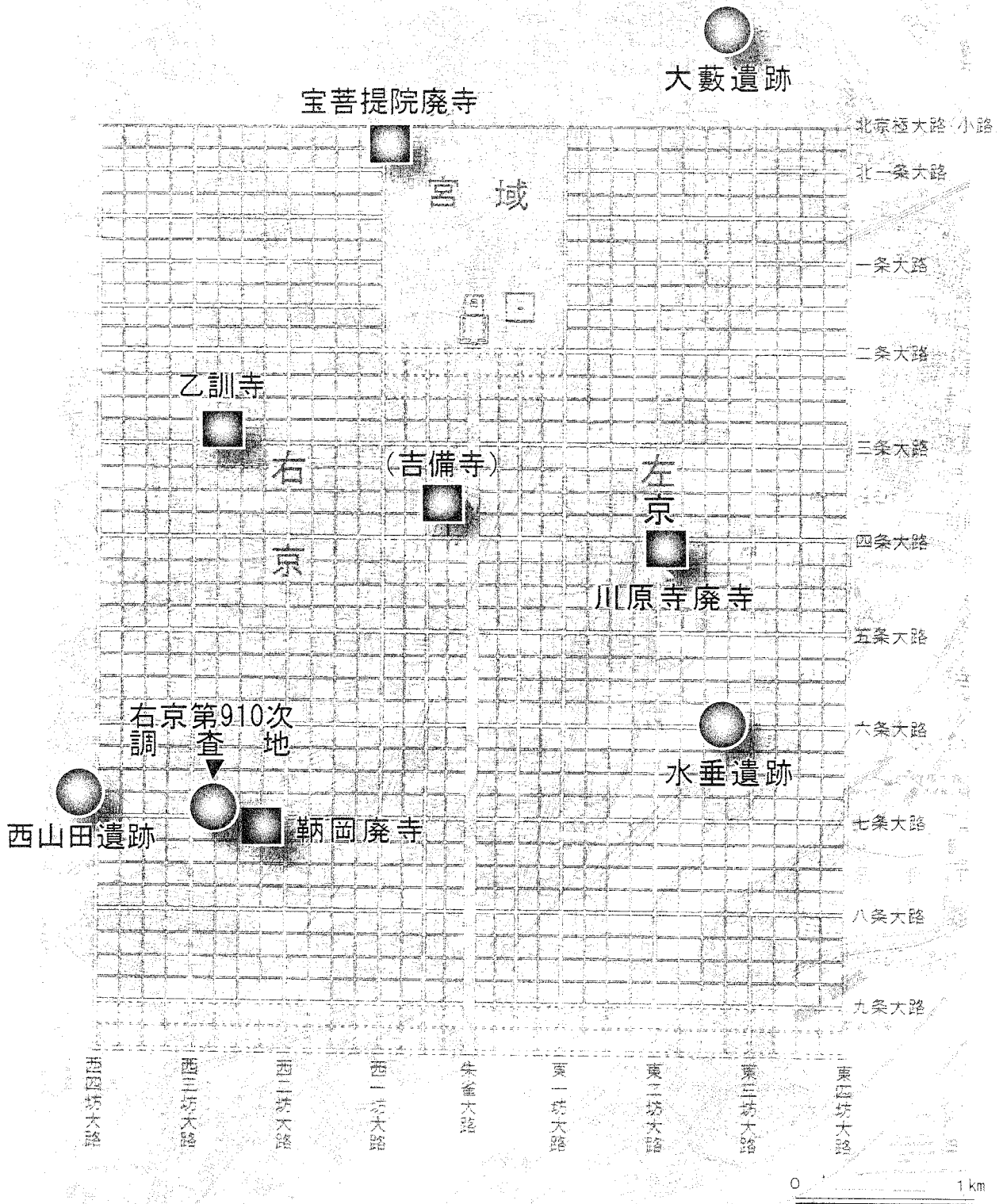
3. 周辺の遺跡から

- ・鞆岡廃寺

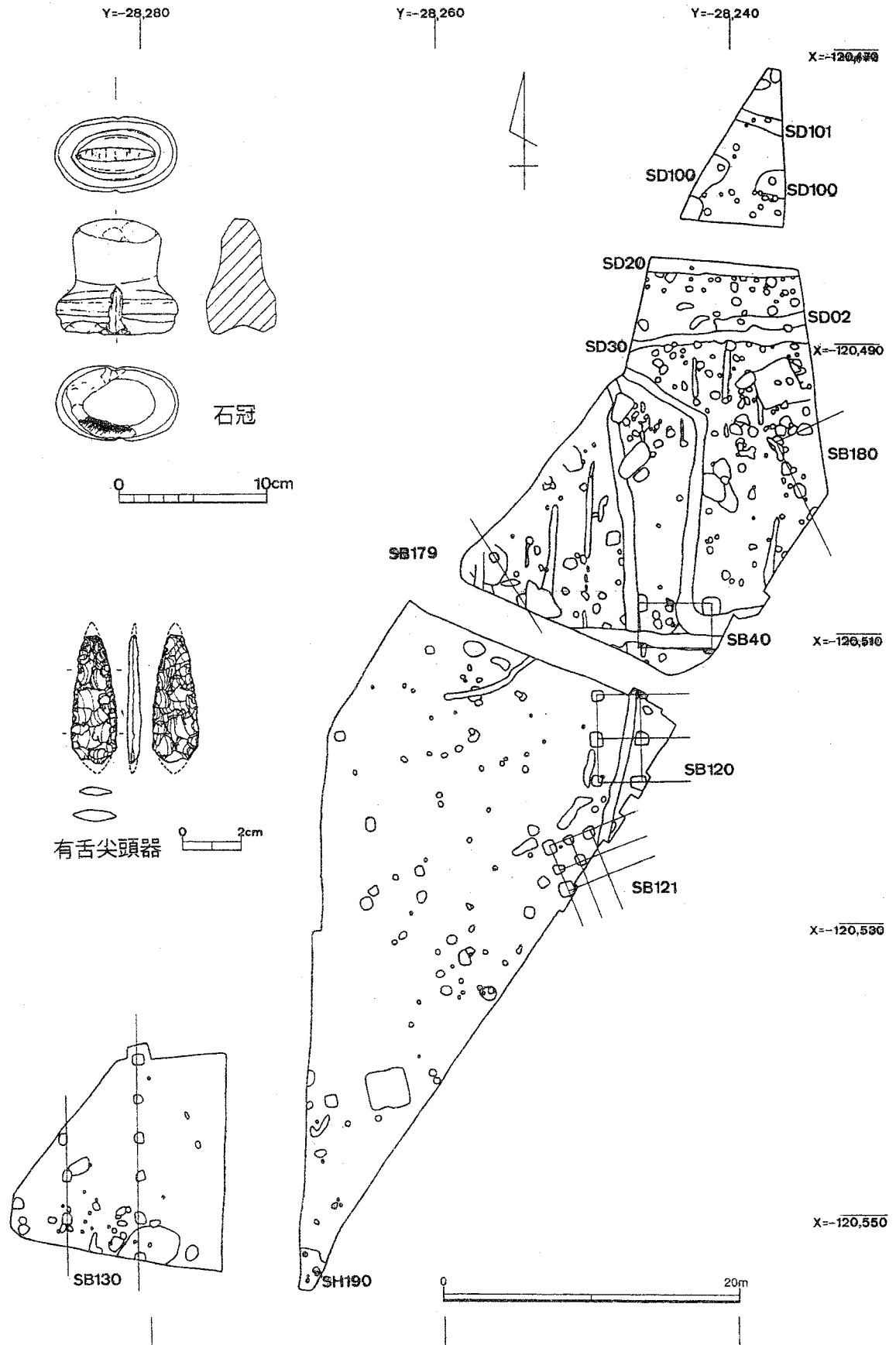
奈良時代に建立された寺院で、長岡京の時期にも修理され、「京下の七寺」の一つと考えられています。

- ・西山田遺跡

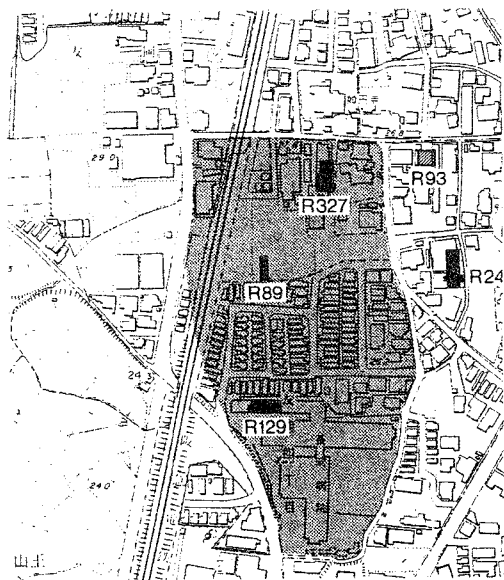
調査地に近い小泉川の対岸で発見された祭祀遺跡です。多量の土馬やミニチアの竈や鍋などの祭祀遺物が出土しました。左京城にある水垂遺跡と同様に都のはずれで行われた祭祀場と考えられています。



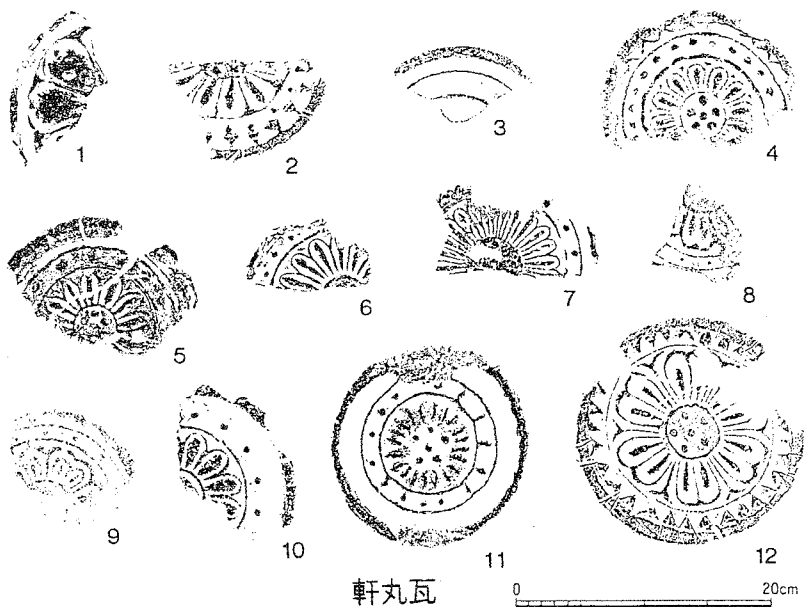
第1図 長岡京と古代寺院



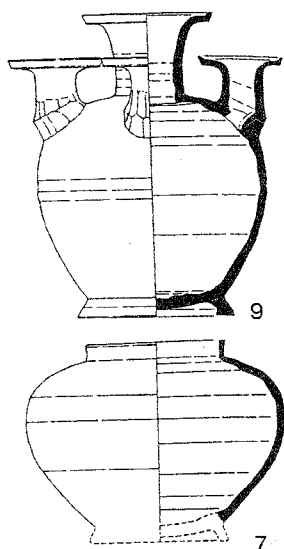
第2図 長岡京跡、右京910次調査(友岡遺跡)の成果



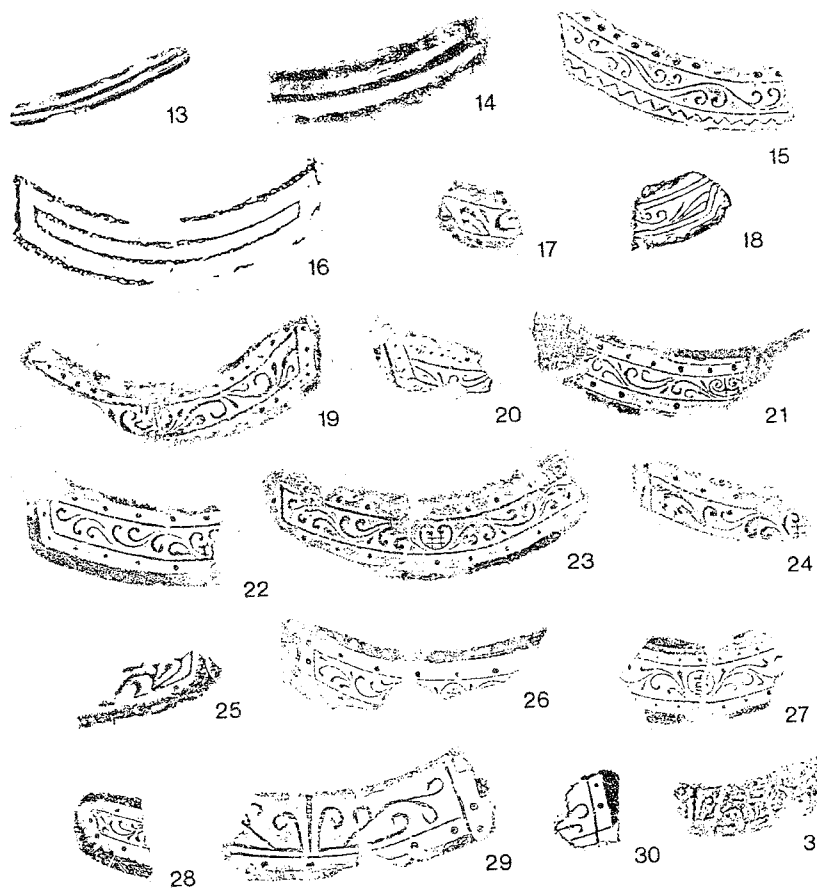
位置図



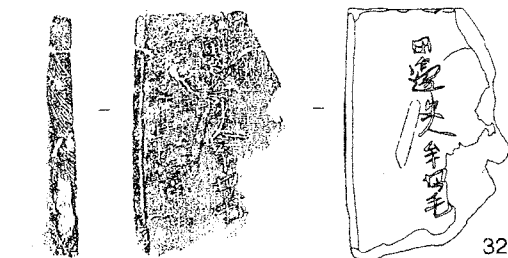
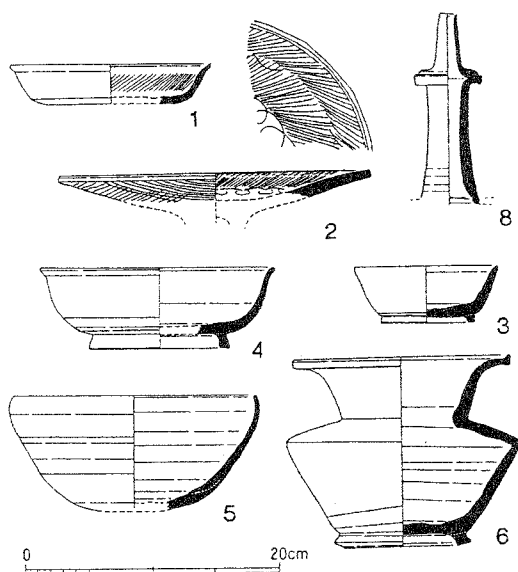
軒丸瓦



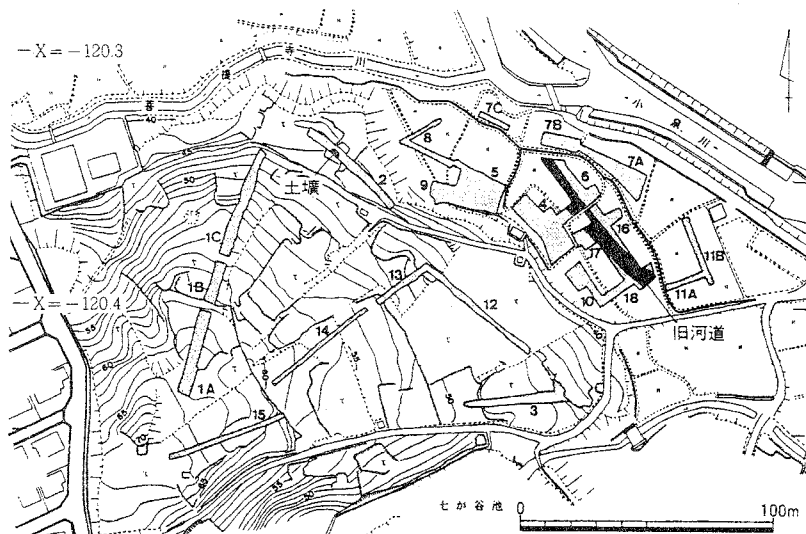
須恵器・土師器



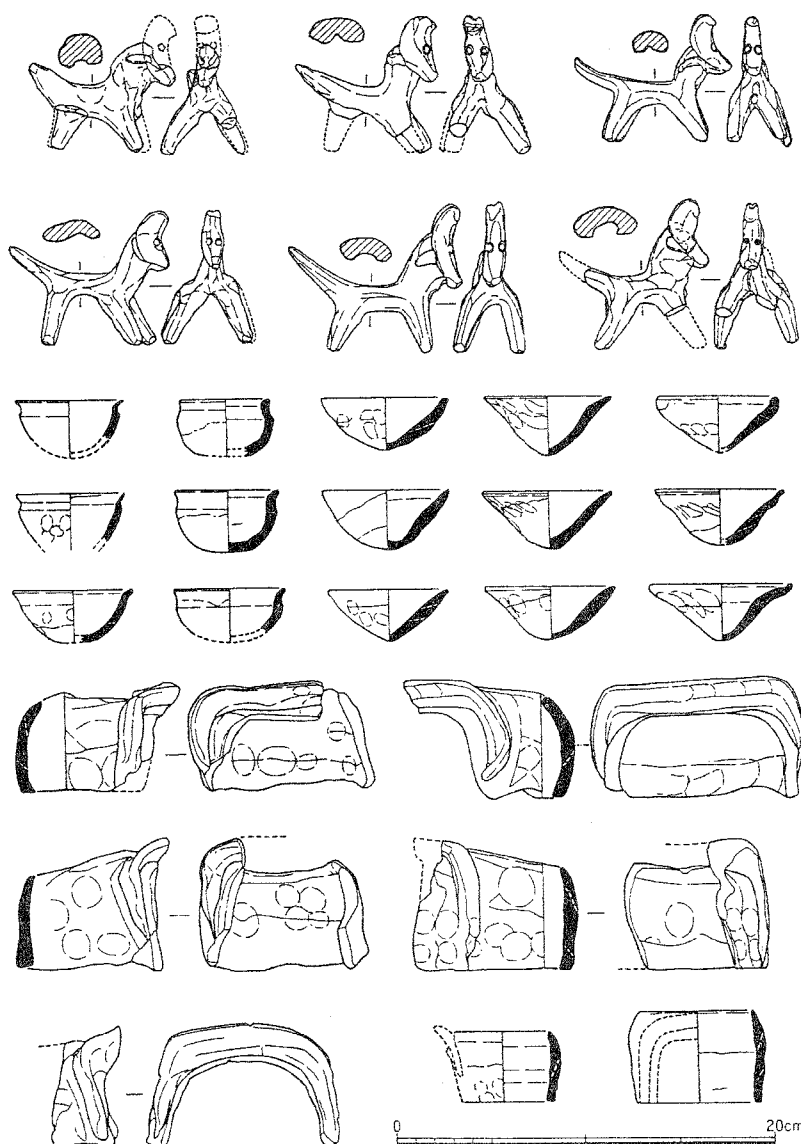
軒平瓦



第3図 鞆岡廃寺の出土品

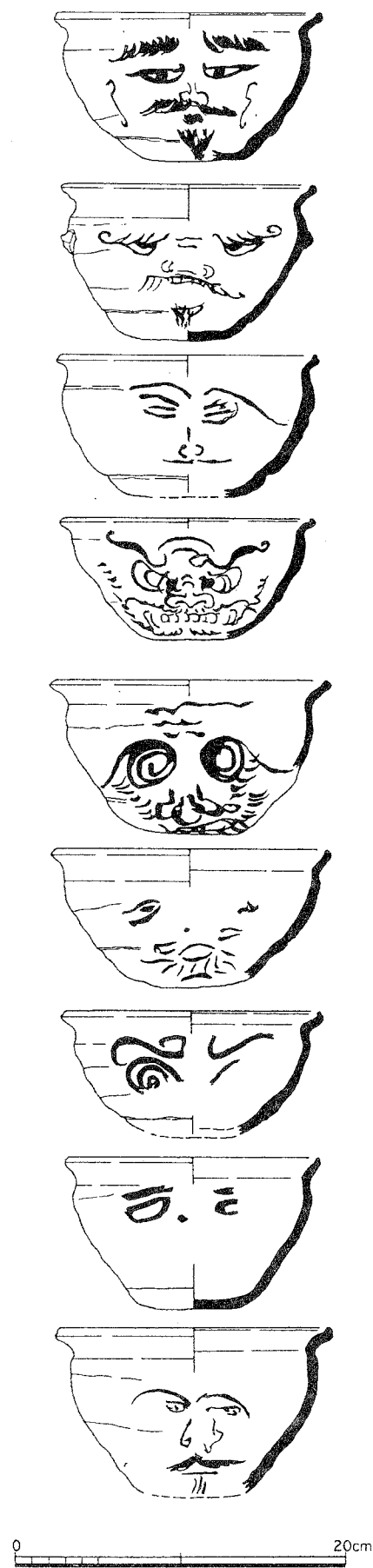


西山田遺跡

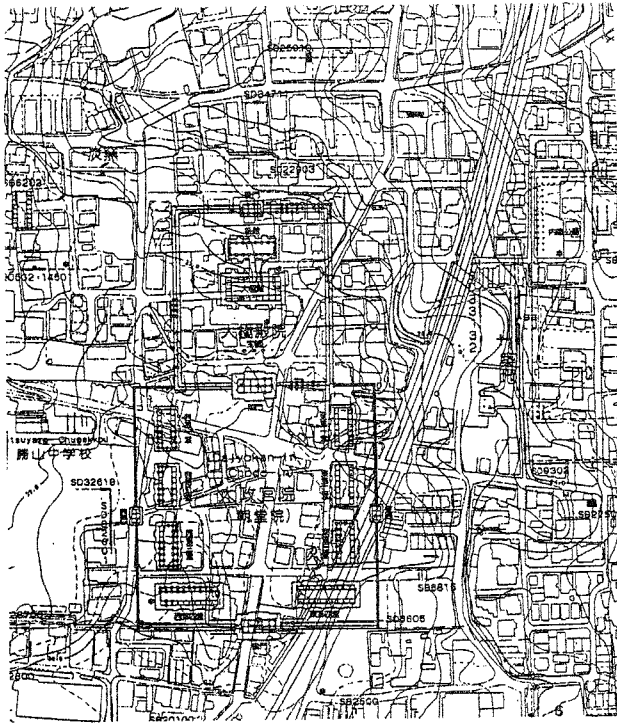


土馬・ナベ・カマド

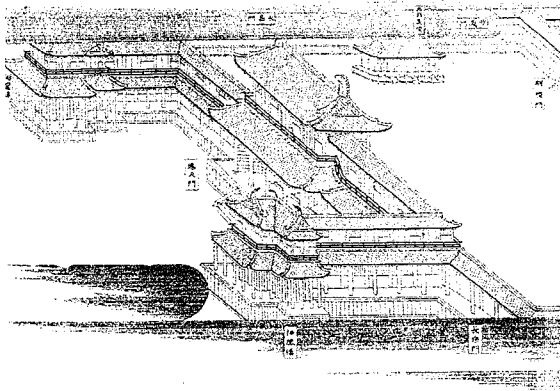
第4図 長岡京の祈りの品々



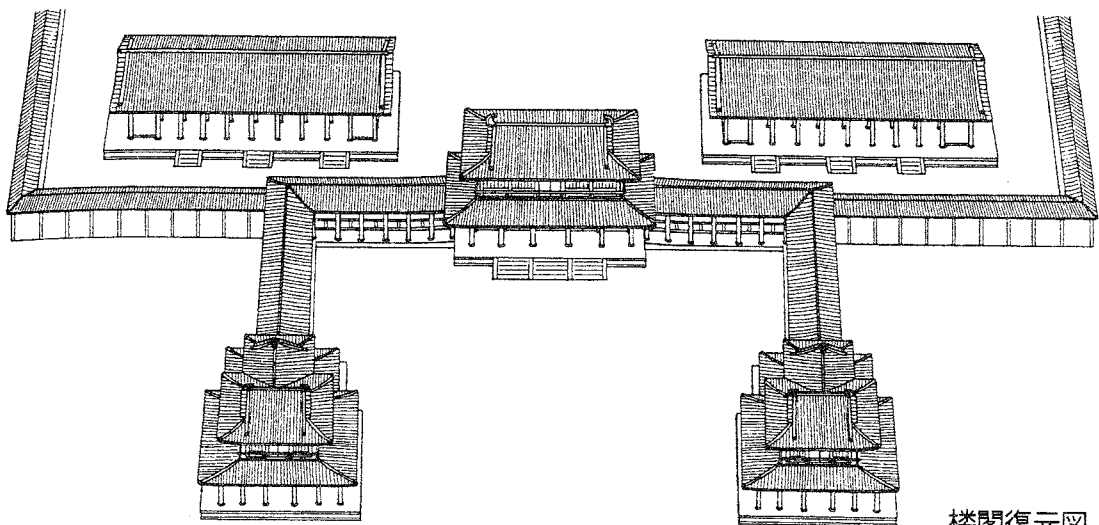
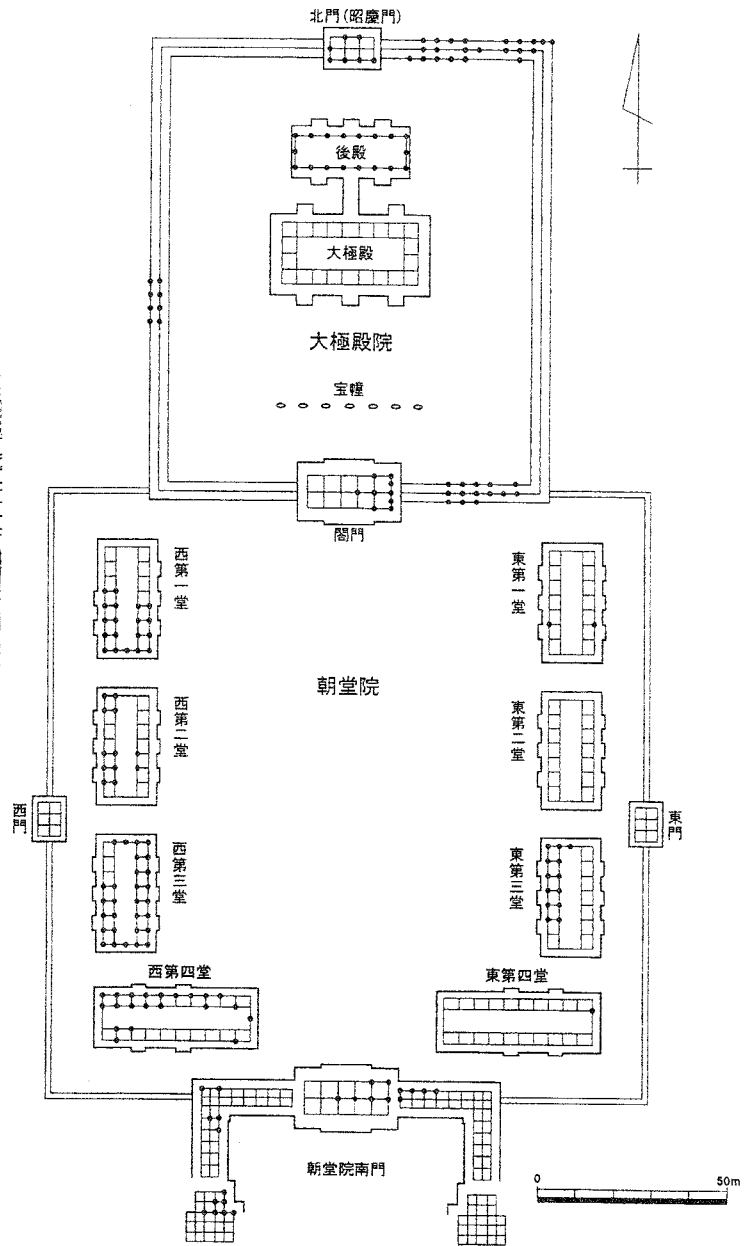
墨書人面土器 (水垂遺跡)



位置図



平安京の楼閣



楼閣復元図

第5図 楼閣の発見

平安宮の饗宴施設—京都市 豊楽院の調査—

(財)京都市埋蔵文化財研究所

調査研究技師 西森正晃

1. 豊楽院とは

鳴くよウグイス平安京で有名な平安京は延暦13年(794年)に桓武天皇によって、長岡京から都が遷されて造られました(図1)。その平安京の北側中央には平安宮が置かれました。平安宮とは国家の政治が行われる場所であり、現代に当てはめると、天皇の住まいである皇居=「内裏」、政治を行う国会議事堂=「朝堂院」、官公庁が集まる霞ヶ関=「官衙群(役所)」が集まる、まさに当時の日本における政治の中心地でした。

今回取り上げる豊楽院は、平安宮の中で朝堂院の西隣に造られました(図2~4)。歴代の都城の中では唯一平安宮にのみ設けられた施設です。正殿(一番重要な建物)は天皇が座る場所がある豊楽殿(アスニー1階にて復元模型が展示されています)と9つの堂、2つの楼閣、17の門が設けられていました。規模は、北端が現在の丸太町通、南端は太子道付近、東端は六軒町通、西端は七本松通に囲まれた東西57丈(約170m)、南北134丈(約400m)の大きさがあります。ここでは様々な宮廷行事の中でも、元旦に行われる宴会や、弓矢の腕比べなどの節会、11月に行われる穀物を神様に捧げるお祭り(新嘗祭)、外国から来た使節をもてなすことなどが行われていました。また、天皇が即位した後には、ここで数日間にわたり宴会(大嘗祭)が行われ、天皇の饗宴の場として使用されています。

豊楽院がいつ頃完成したのかは、史料が散逸しておりはっきりしたことがわかっていません。しかし、延暦18(799)年に外国の使節が訪れた際、豊楽院がまだ完成していなかったので別の場所に仮の建物を建てたとあります。また、大同3(808)年には、桓武天皇の息子である平城天皇が即位した後の宴会を豊楽院で行ったと記述があることから、この年までに完成していたことがわかります。その後、豊楽院で行われていた儀式の多くが内裏などで行われるようになり、荒廃していきます。藤原道長が豊楽院で肝試しを行ったという話も残されています。結局、康平6(1063)

年に火事で焼失した後、再建されることはありませんでした。

2. これまでの調査でわかったこと

平安宮の跡地は、豊臣秀吉による聚楽第^{じゅらくだい}や、江戸時代には京都所司代^{きょうとすしよしだい}関連の屋敷などによって大きく改変され、現在も人家が密集しています。豊楽院跡も例外ではなく、建物規模などの詳細はあまりわかっていません。

豊楽院跡の調査は古く、1928年に丸太町通の拡幅工事の際に建物の基壇^{きだん}化粧である凝灰岩列^{ぎょうかいがん}（図5）が見つかったのが始まりです。しかし、この時は資料不足のため、豊楽院に関係した建物の一部であることまでしかわかりませんでした。後の分析^{ぶんし}で不老門^{ふろうもん}と清暑堂^{せいしょどう}の基壇の一部であると推定されています。その後も豊楽院の東端の溝や、栖霞楼の基壇凝灰岩などが見つっています。中でも最大の発見は、1987年に調査が行われ、現在「史跡平安宮豊楽殿跡」として保存されることとなった豊楽殿跡の調査です。この調査で、豊楽殿と豊楽殿北廊^{ほくろう}（以下北廊）の遺構が良好に残っていることがわかりました。基壇の盛土は丁寧な版築^{はんちく}で築かれ、基壇化粧に使用していた凝灰岩列も残っていました（図6）。礎石を据えていた巨大な穴も見つかり、豊楽殿の建物の大きさが東西約39m、南北約16mであることがわかりました（図8）。さらに2箇所の階段も見つかり、中央の階段は北廊を造る際に埋められていました。つまり、豊楽殿が造られた後に北廊が造られたことがわかったのです。また、豊楽殿の中軸線を割り出すことができ、豊楽院の規模がほぼ明らかとなりました。この調査では緑釉^{りよくゆう}をかけた瓦がたくさん見つかり、豊楽殿が太極殿と並んで緑釉瓦が葺かれていたことが証明されました。鬼瓦や緑釉を施した鴟尾^{しび}などもあり、それらは重要文化財に指定されています（図9）。

3. 今回の調査で見つかったこと

今回の調査は、史跡豊楽殿跡の北側が更地^{さらち}になったことを機に、発掘調査を行いました（図10）。調査前から地面が道路面よりも数十cm盛り上がった状態が観察できたことから、建物跡が見つかるかもしれないと期待されました。調査地は、清暑堂と北廊跡に相当します。清暑堂は豊楽殿で饗宴が行われる際に、内裏や朝堂院から輿^{こし}に揺られて来る天皇が、まず腰を落ち着ける場所です。そして饗宴が始まるま

での控えの場として使用されました。そこから北廊を渡って天皇は豊楽殿に向かったのです。また、大嘗祭の時には天皇が清暑堂に座り、夜通し神楽が行われ、北廊には公卿の座る場所が設けられたとされています。

調査の目的は、豊楽殿跡の調査で、北廊は豊楽殿創建当初には存在していないことが明らかとなったことから、清暑堂と北廊の取り付け部分に注目することでした。

調査の結果、清暑堂では、基壇盛土は固く締まった土で約 30 cm 分を確認しました。基壇の化粧である凝灰岩は全て抜き取られていましたが、抜き取る際に掘った溝を確認しています(図 11)。南面西階段は延石と踏石(1 段目)が見つかりました(図 13・14)。延石の大きさは長さ 92 cm 以上、幅 35-37 cm、厚さが 18-20 cm で合計 5 石確認できました。踏石は長さ 95 cm、幅 40 cm、厚さ 31 cm で 1 石しか残っていません。延石と踏石は組合わさった状態で見つかりました。階段の幅は約 5.2m、張り出しは約 1.5m です。

北廊では、基壇盛土は良好に残っており、幅は最大で約 13m、厚さ約 60 cm あります(図 15)。しかし、北廊の築かれた順序を調べるために断ち割りを入れたところ、北廊は一度に築かれたのではなく、2 回にわたって拡張されていることがわかりました。豊楽殿の調査でも見つかった屋根から落ちる雨水を受ける磚敷きも見つかっています。また、北廊基壇には凝灰岩で化粧していた痕跡が見られず、凝灰岩で化粧している豊楽殿と清暑堂を繋ぐ北廊に化粧がないことは不思議なことです。

また、北廊の下層からは、幅 6 m 以上、深さ 1.8m 以上ある旧地形の谷が存在していることがわかり、谷を埋めた土は一度に埋められていることから、豊楽院を造る際に埋められたことがわかりました。

注目していた清暑堂と北廊の取り付け部には、清暑堂の南面中央に階段が存在した痕跡は見つかりませんでした。

4. まとめ (図 16)

- ・ 清暑堂の南端と西端がわかったことから、清暑堂の基壇幅は東西約 35m であることがわかりました。また、清暑堂と豊楽殿は約 30m 離れていることがわかりました。
- ・ 清暑堂西階段の幅は 5.2m です。豊楽殿の階段幅も約 5.2m であることから、向かいにある豊楽殿を意識して階段幅を合わせたものと考えられます。
- ・ 西階段の張り出しは約 1.5m です。凝灰岩で化粧した基壇をもつ建物の多くは、

取り付く階段の傾斜が最大で45度であるとされています。つまり、階段の張り出し部の長さがわかれば、基壇の最大高が推定できるのです。清暑堂基壇の最大高は1.5mであるといえるでしょう。

- ・ だんじょうづみきだん 壇上積基壇を持つ建物の柱場所は、ほとんどが階段の両端に付く耳石の延長線上、又は内側に位置します。つまり、階段が見つかれば、建物の柱と柱の間を推測することができ、建物を復元する時に、重要な目印になります。西階段が見つかった清暑堂の柱間は14尺（約4.2m）であると思われます。
- ・ 北廊は2度拡幅を行っていたことがわかりました。
- ・ 北廊の下層からみつかった谷は、豊楽院を造るときに埋められていました。また、清暑堂は谷を避けて造られており、豊楽殿と清暑堂の建物配置が旧地形に左右されていたことがわかりました。
- ・ 清暑堂南面中央部には、階段の痕跡も基壇化粧の凝灰岩の痕跡も確認できなかったことから、清暑堂と北廊は同時に造営されたことがわかりました。



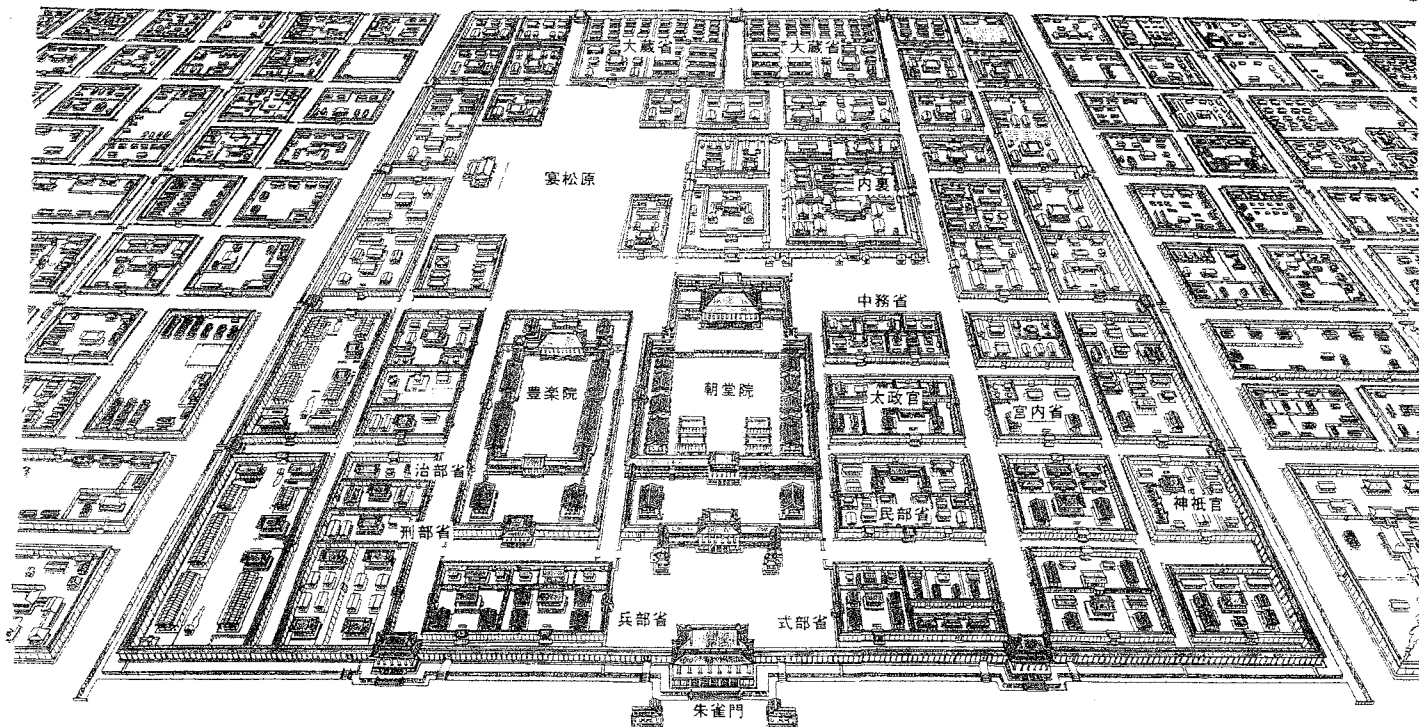


図1 南からみた平安宮

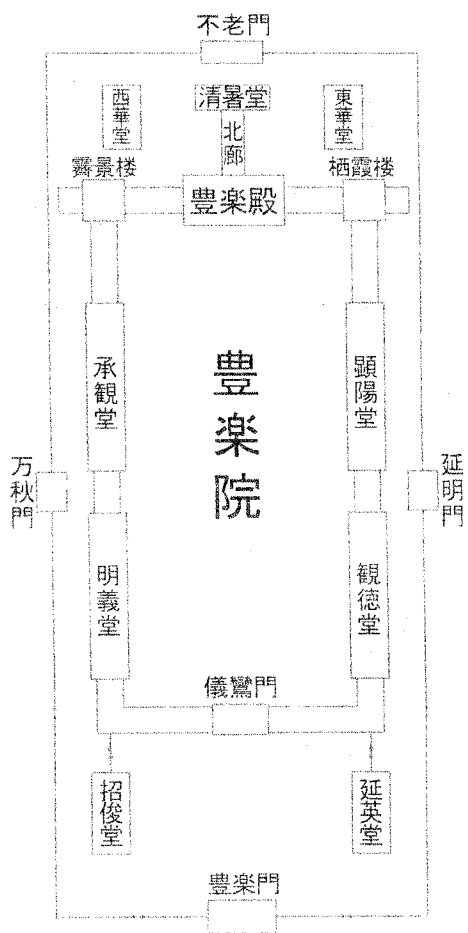


図2 豊楽院建物配置図

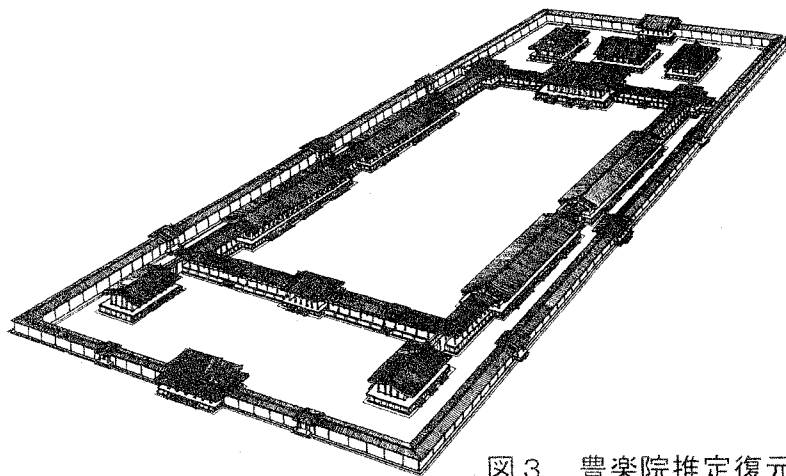


図3 豊楽院推定復元図

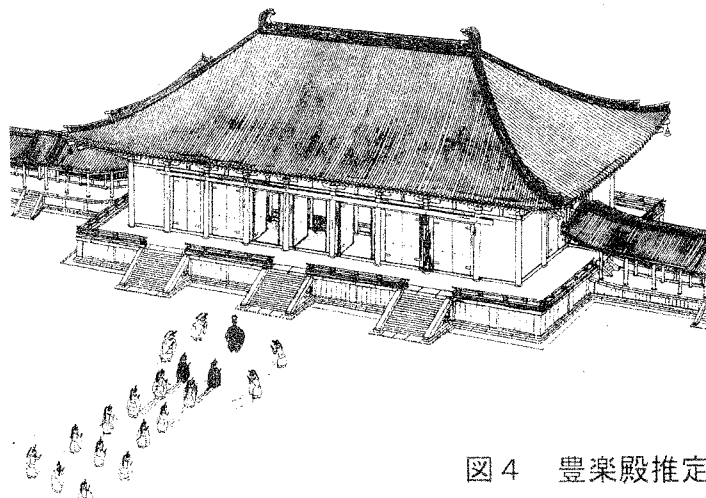


図4 豊楽殿推定復元図

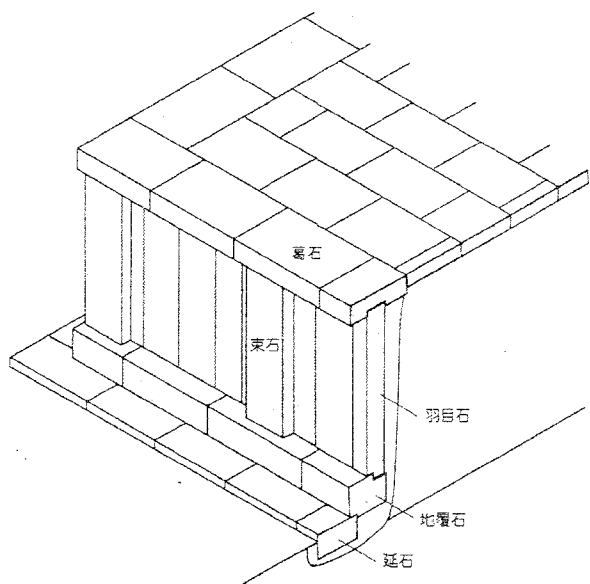


図5 壇上積基壇模式図

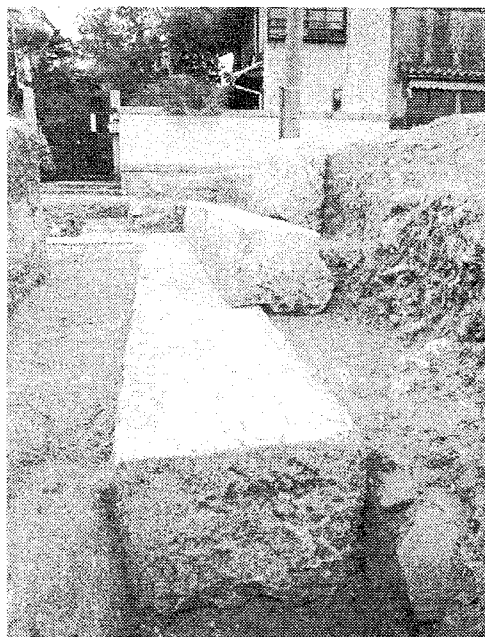
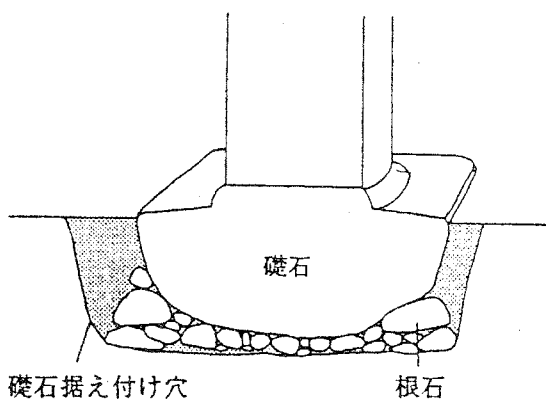


図6 豊楽殿基壇凝灰岩



礎石据え付け穴

根石

図7 礎石据付け状況模式図
『古代の官衙遺跡 1 遺構編』より抜粋



図8 豊楽殿西階段と礎石据付け穴

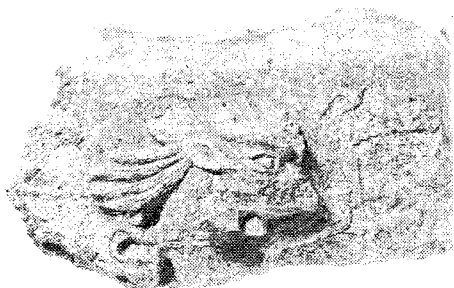


図9 豊楽殿出土遺物 (左から緑釉鴟尾、緑釉瓦、鬼瓦)



図10 今回の調査場所

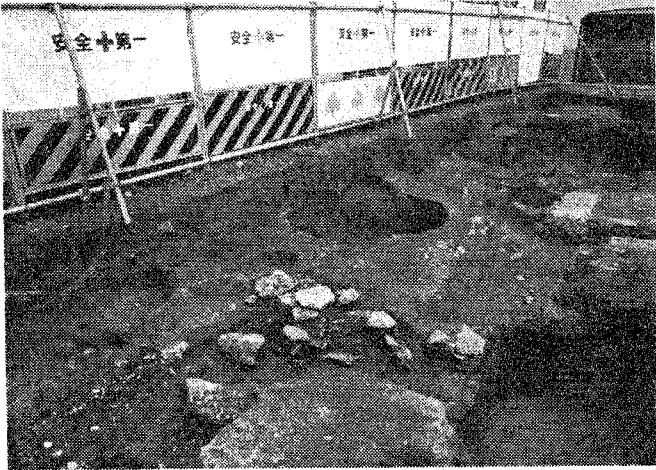


図11 清暑堂基壇凝灰岩を抜き取った溝

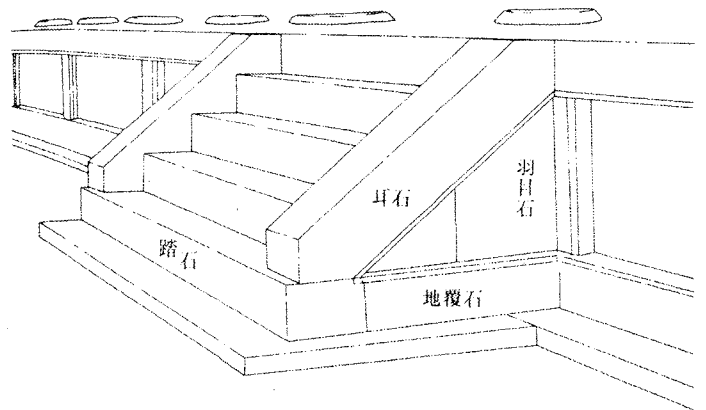


図12 階段模式図

『古代の官衙遺跡 1遺構編』より抜粋

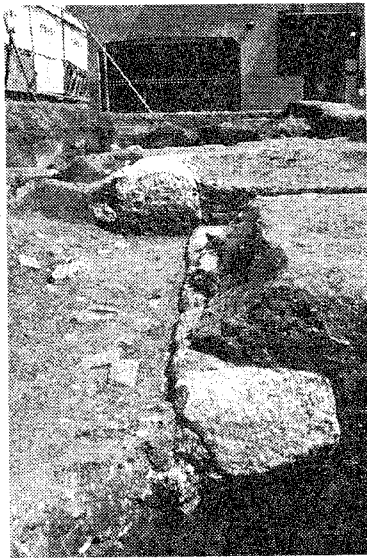
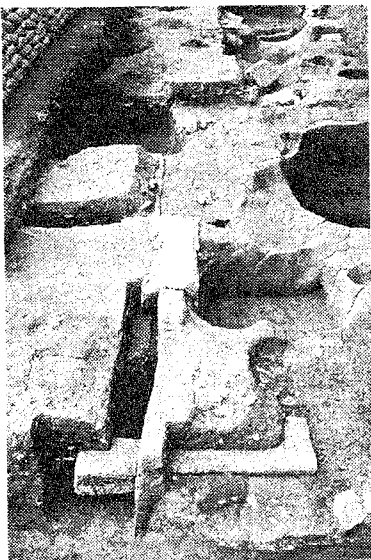


図13 (左) 清暑堂西階段 (東から)

図14 (中) 西階段延石と踏石 (西から)

図15 (右) 北廊版築とセン敷き (西から)

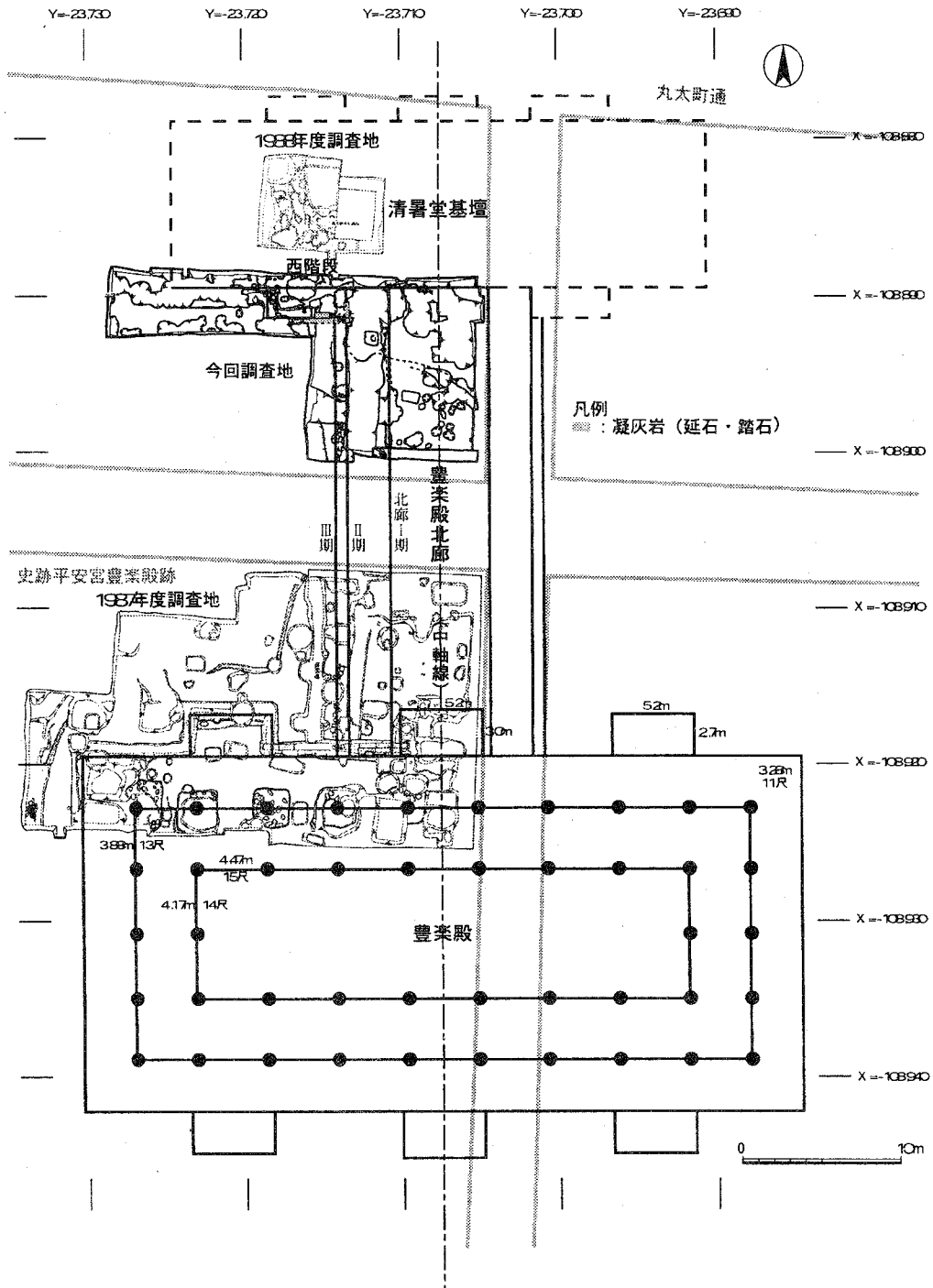
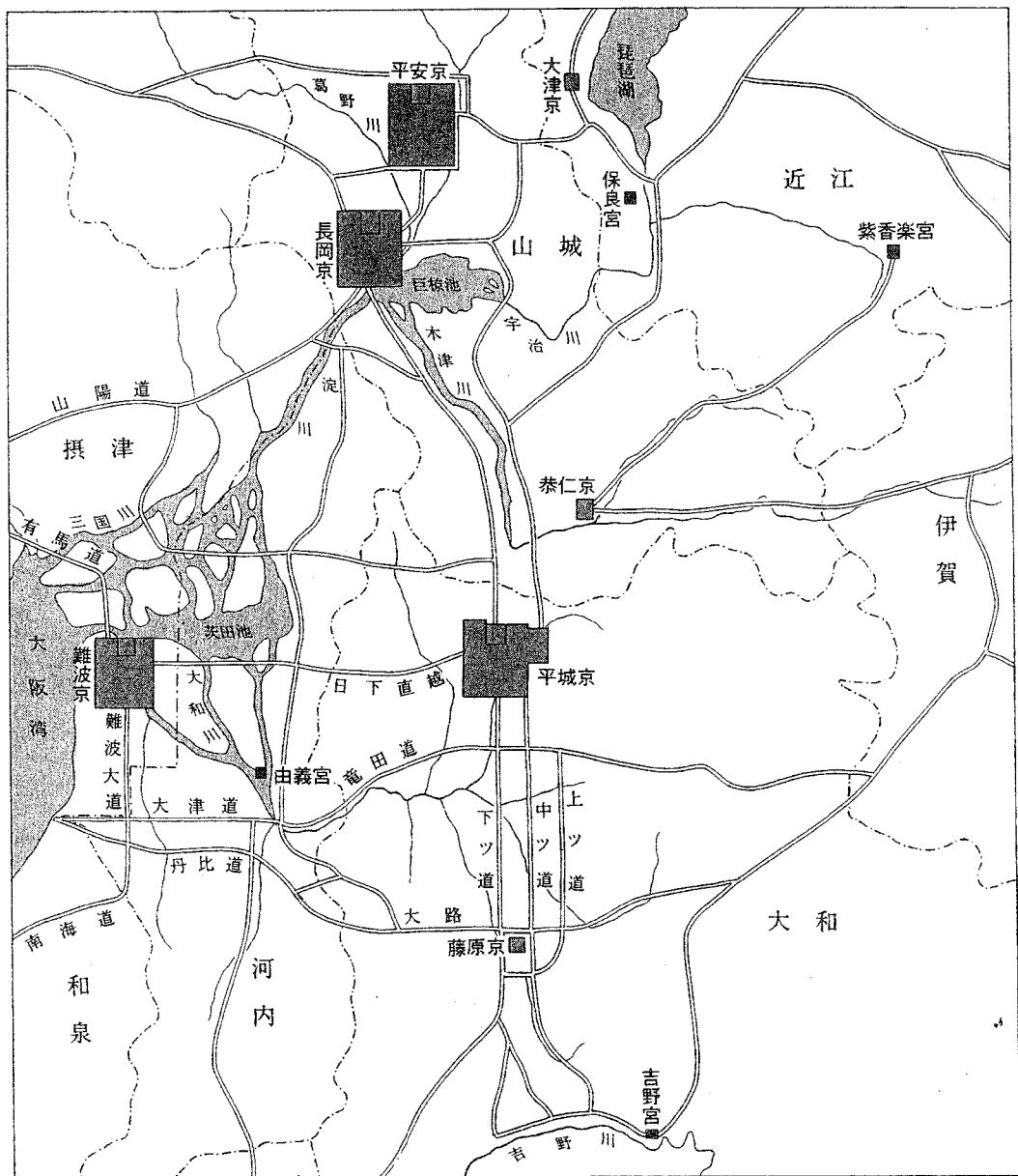


図 16 発掘調査でわかってきた豊楽院北部



(角田文衛総監修『平安京提要』(角川書店) から引用)

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターの現地説明会や埋蔵文化財セミナーなどは、下記のホームページでもご案内しています。

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp/>

(財)京都府埋蔵文化財調査センター
〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075) 933-3877 (代) FAX (075)922-1189